

当院における高体重患者の至適透析の試み

医療法人社団 三思会 東邦病院 ME科

○久保田紗織 星野晴香 若林悟 大澤佑介 宮本邦生
坂田賢一 佐々木寿子 佐野浩之 松本理恵 小川浩司
松村昌樹
腎臓血液センター
吉田弘明 小林さつき 松本孝之 坂本龍彦 植木嘉衛

【背景】

維持透析患者において十分な透析量を確保することにより生命予後の向上に繋がり、良好な透析環境を確保することができる。当院における過去 5 年間の透析効率を見直し問題点の抽出をおこなった。

【目的】

透析効率は高体重患者ほど低い傾向にあり、膜面積や血液流量が足りていないことがわかった。そこで今回、高体重透析患者を対象に透析効率の向上を図った。

【対象・方法】

今回の研究に同意の得られたDW70kg以上の慢性維持透析患者(男性12名)を対象に膜面積、穿刺針、血液流量、透析液流量を変更し kt/v の比較を行った。

【結果】

膜面積、穿刺針の変更により kt/v の有意な差はみられなかったが、上昇傾向にあった。血液流量 300ml/min に変更すると kt/V は 1.50 から 1.73 に有意に上昇した。また、透析液流量 600ml/min に変更すると Kt/V1.73 から 1.75 と変化は見られなかった。

【考察】

透析効率を向上させるためには膜面積や血液流量を適正にすることが重要であること、また最も透析効率に影響するのは血液流量であることがわかった。しかし、透析液流量を変更しても透析効率の変化は見られなかった。今回の研究で同意の得られなかった患者には、膜面積が大きくなること、穿刺針が太くなること、血液流量や透析液流量が多くなることへの不安があった。透析効率を見直して問題点を改善し、個々の透析患者に適した透析を施行することにより、生命予後、QOLの向上に繋がる。至適透析を実践していくには患者の訴えに耳を傾け、コミュニケーションをとることが重要であり、透析患者の精神的不安や肉体的苦痛を取り除き、透析環境を維持することによりはじめて良質な透析医療を提供できるものと考えられる。